

日本語方言形成論の研究

著者	澤村 美幸
号	21
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	文博第333号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59353

さわ むら み ゆき
澤 村 美 幸

学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文博第 333 号
学位授与年月日	平成22年 3 月25日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	東北大学大学院文学研究科 (博士課程後期 3 年の課程) 言語科学専攻
学 位 論 文 題 目	日本語方言形成論の研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 小 林 隆 教 授 齋 藤 倫 明 教 授 後 藤 齊 准教授 大 木 一 夫 准教授 甲 田 直 美

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、その題名が示すように、日本語方言形成論をテーマにしたものである。

方言形成論とは、方言が形成される過程と、その要因を解明する研究分野である。すなわち、現在見られるような日本語方言の地理的広がりや、歴史的にどのように形作られてきたのか、そして、そこにはいかなる事情や背景が関与しているのか、といった点を究明していくのが方言形成論の目的である。

初めに、本論文の構成を掲げ、続いて、本論文の内容を各章ごとに示していく。

.....

I. 序 論

第 1 章 日本語方言形成論の立場と課題

1. 方言形成論の立場
2. 方言形成論の課題

第 2 章 本論文の目的と方法

1. 本論文の目的
2. 本論文の方法と資料
3. 本論文の構成

Ⅱ. 本論

第3章 社会構造の地域差と方言形成 —「シャテー(舎弟)」を例として—

1. 本章の目的
2. 「シャテー(舎弟)」の方言分布
3. 文献から見た「シャテー(舎弟)」の歴史
4. 「シャテー(舎弟)」の普及に関する社会的背景
5. 本章の結論と今後の課題

第4章 民俗儀礼の変遷と方言形成 —〈葬式〉の名称を例として—

1. 本章の目的と方法
2. 〈葬式〉の方言分布
3. 方言分布と文献上の歴史との総合
4. 葬送儀礼の変遷との対応
5. 本章の結論と今後の課題

第5章 意味変化の地域差と方言形成 —「スガリ〈蜂〉・〈蟻〉」を例として—

1. 本章の目的と方法
2. 文献に見られる中央語の「スガリ」の意味
3. 方言における「スガリ」の分布と意味変化
4. 本章の結論と今後の課題

第6章 意味変化における位相差と方言形成 —「スガル〈鹿〉」を中心として—

1. 本章の目的
2. 上代の「スガル」の意味
3. 方言における「スガリ」の意味変化
4. 文献における「スガル」の意味変化
5. 本章の結論

第7章 感動詞の歴史と方言形成 —失敗の感動詞を例として—

1. 本章の目的
2. 失敗の感動詞の方言分布
3. 文献での現れ方と方言分布の対照
4. 感動詞の地域差が意味する歴史的傾向
5. 今後の課題

第8章 感動詞の成立と方言形成 —痛みの感動詞を例として—

1. 本章の目的
2. 調査・地図化の方法
3. 歴史的経緯の推定
4. 文献における変化の過程 — 中央語の変化

5. 総合

Ⅲ. 結論

第9章 本論のまとめと今後への提起

.....

第1章 日本語方言形成論の立場と課題

第1章では、本論文のテーマである日本語方言形成論の立場や、方言形成論の現状をふまえた現段階の課題について述べた。

第1節では、本論文の方言形成論の立場について論じた。方言形成論では、中央を一つの軸として全国の方言を俯瞰し、それらを相互に比較することで、日本語方言の形成について考察する。すなわち、中央から放射された言葉がどのように伝播して地方に普及するのか、あるいは伝播した言葉が、各地でいかに受容され、変化を被ることで方言が生み出されていくのか、さらにそこに、地方独自の営みがどのように関わるのか、といった点を明らかにする。そして、そのような考察を通して、中央から地方への伝播のあり方や、地域的な動向の特色・傾向を見出していくものである。このように、方言が形成される過程・要因を解明することにより、最終的には方言形成の理論化・一般化を目指すことが目標となる。以上のような方言形成論の立場を示した上で、「方言史」や「方言学的日本語史」といった、目的・方法の面で関連性の高い研究分野との相違点を明らかにした。

また、第2節では、方言形成に関わる先行研究を検討し、そこから現段階の方言形成論にとって必要な課題を導きだした。従来の研究で直接的・間接的に方言形成論に関わるものは、具体的な語や文法形式を事例にとり、その変遷を明らかにする記述的な研究と、柳田國男（1927）が提唱した「方言周圏論」などの学説に代表される理論的な研究がある。しかし、現状では、記述的研究と理論的研究の間の落差が大きく開いたままであり、この両者の間を密接に結びつけるような研究が、今後の方言形成論の発展にとって重要である。具体的に言えば、事例の記述を行いながらも、常に理論を意識した視点を持つこと、あるいは、理論を論じながらも、抽象的な原理の提示にとどまらず、具体的な現象に基づいて方言形成の過程と要因を詳細に検討することが、現段階で求められている方言形成論のあり方であると考えられる。

以上のような背景をふまえ、今後の方言形成論を発展させていくために取り組むべき課題として、以下の3つの研究を設定した。

- (1) **方言形成の要因を明らかにする研究**：方言形成にはたらく要因を、従来指摘されてきたものに加えて新たに洗い出し、体系化する。さらに、それらが全国的な方言の成立に与えた影響について、方言形成論の立場から検討していく。
- (2) **方言形成の過程を明らかにする研究**：多くの事例をもとに、形態変化・意味変化のパターンを整理し、類型化を行う。また、方言間の比較にとどまらず、中央語における変化との比較という視点も取り入れる。
- (3) **新たな言語分野における方言形成の特徴を把握する研究**：談話、言語行動、オノマトペ、感動詞など、従来全国的なレベルで研究が進んでいなかった分野に対象を拡大し、それらも含めて、言語全体から方言形成のあり方を考察していく。

第2章 本論文の目的と方法

第2章では、本論文の目的と方法について論じた。

第1節では、第1章で論じた課題をふまえ、本論文の目的として、具体的に以下の3つを設定した。

(1) 方言形成の要因を明らかにする研究 — 社会的背景

方言形成に作用する要因の一つである社会的背景に注目し、方言形成に社会的背景が及ぼす影響関係を明らかにする。具体的には、親族語彙と民俗儀礼語彙を対象として検討していく。また、地方独自の社会的背景が、伝播してきた語の受容や拒否にどのように関わるのかなど、伝播の受け手側の問題にも着目していく。

(2) 方言形成の過程を明らかにする研究 — 意味変化

意味変化の問題を取りあげ、中央から伝播した語に生ずる拡張・縮小・交替などの意味変化の過程を描き出していく。地域ごとにどのような種類の変化が起こりやすいのか、また、地域によってそれらの方向性がどう異なるのかといった点に着目して考察していく。さらに、方言間の比較にとどまらず、中央語における意味変化との比較も取り入れる。

(3) 新たな言語分野における方言形成の特徴を把握する研究 — 感動詞

これまで全国的な視野での研究が進んでいなかった分野を開拓し、言語全体から方言形成のあり方を考察する。本論文では感動詞を対象とし、感動詞の方言に地域差が認められるのかどうかや、それらの感動詞の地域差は方言形成論の立場からどのように説明されるのか、といった点に着目した検討を行う。

本論文では、このような目的をもとに、それぞれ事例に基づいた検討を行うことで、方言形成の一般化のための観点を指摘していく。

第2節では、本論文で用いる方法と資料について説明した。まず方法論については、基本的には従来の「(全国)方言史」研究や、「方言学的日本語史」と同様の方法を用いる。すなわち、方言資料と文献資料をもとに推定した歴史を総合することにより、中央や全国の方言との対比の中で、方言形成の要因や過程について考察していくという方法である。より具体的には、方言については、現代方言を資料として方言分布図を描き、それをもとに歴史を推定する方言地理学的方法に基づき、また比較方言学的方法を援用する。また、比較の軸となる中央語史を把握するための方法は、文献を資料とした文献国語史的方法を用いる。なお、本研究の特色として、方言形成に関わる社会的背景を明らかにする点があるが、そのために民俗学や文化人類学等、関連する諸分野の先行研究の成果を参考にし、言語外情報を積極的に利用していくこととした。

また、本論文では、全国的な地域差について把握するための資料として、「消滅する方言語彙の緊急調査研究」の調査結果を利用したが、現段階では一部を除き、そのデータが公開されていない。そのため、本論文の基礎的な理解のために、この調査の概要を説明した。

続く第3節では、本論文の構成について示した。

第3章 社会構造の地域差と方言形成 —「シャテー(舍弟)」を例として—

第3章では、〈弟〉を表す方言の「シャテー(舍弟)」を事例とし、その方言形成のあり方に社会的背景がどのように関与していたのか論じた。「シャテー」は、もともと漢詩・漢文で用いられた言葉であっ

たが、中世には武士階級の位相語として日本語に定着した。その後、「シャテー」は武士階級によって東日本の中心である関東にもたらされ、関東で庶民語化が起こり、東日本の広範囲へと伝播した。この関東での庶民語化には、長子と次男以下を相続者か否かという観点から大きく区別する、武士の社会構造と酷似した東日本独自の社会構造が関わっていたと見られる。一方、中央を含む西日本では、長子と次男以下を相続の面で区別しない社会であり、「シャテー」は武士階級の位相語としてとどまり続けたため、庶民語化が起こらず、方言にも広まることはなかったと考えられる。

以上のような「シャテー」の事例は、語の伝播は、受け手側である地方に中央語を受容する必然性が生じた際に起こる場合があることを指摘するものであり、中央の文化的威光の高さのみが伝播の原動力となるのではないことが明らかになった。

第4章 民俗儀礼の変遷と方言形成 ―〈葬式〉の名称を例として―

第4章では〈葬式〉を表す方言を事例とした検討を行った。〈葬式〉のような社会性を帯びる事物や現象の場合には、その実態や位相の変化が方言の形成にも影響を与える可能性が高い。そのため、〈葬式〉の方言分布を扱うにあたっては、単に語義的な意味だけでなく、その語と対応する事物や現象のあり方の違いや、位相による違いにも注目して考察した。

その結果、〈葬式〉を表す名称である「オクリ」、「ダビ」・「ダミ」、「ソーレイ」・「ソーレン」、「トムライ」、「ジャンボン」、「ソーシキ」という6種8語は、葬送儀礼の歴史的変遷の3段階と対応する形で展開し、それが方言分布の形成に反映していることがわかった。また、〈葬式〉を表す名称の一つである「ソーシキ」という語は、もともと知識層の用語であったが、葬送儀礼の変化という社会的背景に応じて各地で局所的に庶民層の日常語に取り込まれたものであり、中央からの「地理的伝播」のみならず、地域ごとに階層差を超えて起こる「位相的伝播」という伝播様式により、方言が形成される場合があることが明らかになった。

第5章 意味変化の地域差と方言形成 ―「スガリ〈蜂〉・〈蟻〉」を例として―

第5章では、〈似我蜂〉を意味する「スガリ（スガル）」という語の意味変化を事例として取り上げ、「スガリ」が、原義の〈似我蜂〉から、地方によって異なる意味へと変化した経緯について論じた。「スガリ」は、東北では次第に〈似我蜂〉と似た特徴を持つ蜂の意味を取り込んで意味を拡張させていき、最終的に〈蜂〉の総称へと変化していったが、中部では〈地蜂〉への変化にとどまった。このような違いはあるものの、東日本における「スガリ」は、基本的に〈蜂〉の範疇の内部での意味変化が起こったと言える。それに対し、西日本においては、「スガリ」は〈蟻〉という別の昆虫へと意味が交替していくという変化が見られ、東西で意味変化の種類が異なる様子が観察された。この結果は、東日本における変化の方がより極端で活発であるとする従来の見解とは逆の傾向を示したが、東日本内部の地域差に関する傾向については、先行研究の指摘と一致した。すなわち、東日本の中でも、東北はより進んだ意味変化を見せたのに対し、中部は変化に対して保守的な傾向を示した点は、中央からの地理的な距離が意味変化の進みややすさに影響する傾向があることを確認する結果となった。また、「スガリ」の事例においては、地方における自律的变化に加えて、地方独自の文化的背景や音声的背景などがはたらき、意味変化の発達を抑制したり促進したりした可能性があることも明らかになった。

第6章 意味変化における位相差と方言形成 ―「スガル〈鹿〉」を中心として―

第6章では、第5章と同じ「スガル（スガリ）」という語を事例とし、中央語において、〈似我蜂〉か

ら〈鹿〉の歌語へと意味を変化させていった経緯を解明し、第5章で論じた地理的な意味変化と比較した。中央語における〈似我蜂〉の「スガル」は上代の文献で確認されるものの、中古には衰退し、既に古語化していたと見られる。その後は方言に伝播したものと、中央語で歌語という特種な位相に残ったものとで、意味が分かれていった。このうち、中央における「スガル」は、もとの〈似我蜂〉の意味が忘れられ、「むなわけ（胸別）」という言葉を紹介して新たに〈鹿〉という意味が与えられたことにより、歌語として生き延びることになった。一方の方言における「スガル（スガリ）」は、第5章で見たように、原義の〈似我蜂〉から、地方によって〈蜂〉の総称や〈蟻〉など、〈似我蜂〉との類似点を契機として、異なる意味へと変化していった。

このような「スガル」の歌語としての意味変化は、方言における意味変化が基本的に原義と変化後の意味との共通点を契機とした“自然な変化”であるのに対し、歌語の「スガル」は、〈鹿〉の意味であると解釈され直されたことによる“人為的な変化”であると言えることを指摘した。

第7章 感動詞の歴史と方言形成 — 失敗の感動詞を例として —

第7章では、「失敗の感動詞」を例に、その方言分布がいかに形成されたかという問題や、感動詞の地域差が意味する歴史的傾向について論じた。失敗の感動詞には、多くの種類が認められるが、それぞれの形式は比較的まとまった分布を示しており、それぞれ地域的な広がりをもって使用されていることがわかった。また、文献での現れ方と方言分布の比較により、失敗の感動詞の方言形成における全体的な傾向についても検討した。その結果、もともと失敗の感動詞として中央から方言へ広まった語形は分布領域が広く、伝播力や定着力が強かったことや、感動詞の伝播のスピードは、一般的な語の伝播速度に比べて格段に速いこと、意味的な観点から見ると、失敗の感動詞には、もともとより広い意味で使われていたり、本来別の意味で使用されていたりしたものが、意味変化を起こすことで成立したというケースが目立つことがわかった。

また、歴史的・地理的な傾向としては、西日本と東日本において「概念系・非概念系」、「分化・未分化」、「定型化・非定型化」といった大きな対立が認められ、東日本から西日本へと変化の発達段階を示す可能性があることがわかった。さらに、このような東西差には、東西日本で言語的な発想法や運用意識が異なるという、より大きなレベルの問題が反映しており、さらに、その背景に、東西日本の社会的・文化的基盤の違いが潜んでいる可能性があることを指摘した。

第8章 感動詞の成立と方言形成 — 痛みの感動詞を例として —

第8章では、「痛みの感動詞」を事例として取り上げた。この事例では、東日本においては、叙述も感嘆も等しく「イタイ（終止形）」で表すのに対し、西日本では、感嘆は形容詞語幹「(ア) イタ」で、叙述は「イタイ（終止形）」でといったように、用法に応じて形式を分化させており、東西で異なるそれぞれ異なる体系が存在し、それが痛みの感動詞の方言分布にも反映していることが明らかになった。さらに、現在の西日本で、痛みを表す最も一般的な形式の「アイタ」は、「イタ」という形容詞語幹から、感動詞「ア」を上接させ、さらに「ア」と「イタ」が複合することで感動詞として成立したことが、文献調査により明らかになった。このように、西日本において、感嘆の形式を独立した感動詞で表そうとする感動詞化が進行した点は、叙述の形式と感嘆の形式とをより明瞭に区別しようという方向での変化が積極的に推し進められたことを意味している。このような西日本の分化的傾向に比べ、東日本における感嘆と叙述を区別しない体系は未分化的状態にあると言える。こうした分化・未分化の違いは、語彙的なものではあるが、第7章で取りあげた「失敗の感動詞」の事例においても同様に観察されたことか

ら、感動詞の東西差を考える上で、今後重要な視点になってくると考えられる。

第9章 本論のまとめと今後への提起

第9章は、本論文の結論に当たる。第1節では、本論（第3章～第8章）で論じたことを整理するとともに、第2章で掲げた3つの目的に対応させた形で結論を述べた。

(1) 方言形成の要因 — 社会的背景

第3章・第4章の検討を通し、方言形成の要因として、従来扱われてきたような言語内の要因のみでなく、社会的背景という言語外的要因が重要であることを指摘し得た。したがって、方言形成を論ずるにあたっては、中央語を受容する地方側の社会構造や、事象自体の社会的性質に注目する必要があると言える。

(2) 方言形成の過程 — 意味変化

意味変化の問題について論じた第5章・第6章では、事例としたのは「スガリ（スガル）」一語であるが、地方における意味変化の傾向が従来の指摘とは異なることや、意味変化の過程に地方独自の要因が絡むことにより、変化を抑制・促進することがあることなどを指摘し得た。また、地方における意味変化と、中央における意味変化のメカニズムが大きく異なる場合があることも明らかになった。方言形成の過程を論じるにあたり、意味変化の問題は、今後さらに事例の蓄積による十分な検討が行われるべき課題であると言える。

(3) 新たな言語分野における方言形成の特徴 — 感動詞

第7章・第8章の検討を通して、感動詞は方言形成論にとりたいへん興味深い分野であることがわかった。上記で指摘したような東西差がどれだけ他の項目にも見られるか、また、二つの事例に共通して見られた分化の問題がどのくらいの範囲に適応する問題なのかといった点は、これから多くの事例をもとに検討していく必要がある。しかし、感動詞の地域差に学界の関心が向き始めたのはつい最近のことであり、現段階ではそれを研究するためのデータが圧倒的に不足している。したがって、今後の研究のためには、感動詞の全体像を把握するために網羅的に項目設定を行い、全国的な調査を実施することが不可欠である。

第2節では、方言形成論の理論化・一般化に向け、本論文が提起する課題を示した。具体的には、以下の4つである。

【社会的背景のさらなる解明】

本論文では方言形成の要因として、地方独自の社会的背景を取り上げたが、そこで論じたのは、中央から伝播してきた語を地方が受容する際や、あるいは積極的に取り入れる際に、地方独自の社会的背景が関与しているという場合に限られた。しかし、社会的背景が方言形成に関わるのは、そのような受容といった局面だけではなく、地方が中央から伝播してきた語を受容した後に、社会的背景が関わることによって何らかの変化が起こることなども考えられる。地方独自の社会的背景の存在が、中央からやって来た語にいかなる影響を与えるのかといった観点からの研究も、理論化・一般化にとって必要となってくる。さらに、社会的背景にはどのような種類があるのか、また、どのような社会的背景が方言形成に

影響を与えたり、与えなかったりするのかなど、理論化・一般化のためには、今後、広くさまざまな事例を総合して検討していかなければならない。

【多様な要因の網羅的把握】

方言形成にはたらく要因としては、当然のことながら、社会的背景以外の要因も考えられる。社会的背景と同様、言語外的要因として重要なものに文化的背景や自然的背景がある。また、それらと対比されるものとして、言語内的要因も挙げられる。これらの要因としては、例えば文化的背景として農作物や生活用品の流通、自然的背景として自然障害や気候などといった点が指摘され、言語内的要因については、専ら言語体系の側面から論じられてきた。しかし、それらはいずれも断片的な要因の指摘であり、実際に方言形成にはたらく要因にはさまざまなものがあると思われる。例えば、本論の第5章・第6章では、ハチ食という文化的背景や、単音節化という音声的背景などが意味変化の発達に作用する要因として観察された。このように、方言形成にはたらく要因は実に多様であり、方言形成を考えるにあたっては、それらがどのように関与しているかを積極的に問題にしていく必要がある。

【研究のための枠組みの構築】

方言形成論の理論化・一般化を図るためには、要因論のみに限らず、全体的な研究の枠組みが必要である。方言形成論の枠組みとは、方言形成にどのような観点や要素があり得るのかを網羅したものであり、それを構築することにより、方言形成論研究の全体像を俯瞰することが可能になる。さらに、枠組みを構成する観点や要素を洗い出すだけでなく、それらがどのように相互に関連しあい、方言の形成に作用しているのかという有機的関係を把握する作業も重要である。

【言語的発想法の方言形成論へ】

本論文では、第7章・第8章で扱った感動詞のどちらにも東西差が見られ、その背景として、東西日本で言語的な発想法の異なりが反映している可能性があることを指摘した。このことは、従来方言学で扱われてきたような、言葉の形式や意味だけでなく、その背後に存在している表現や運用に関する規範意識・志向性などの言葉を操る考え方、すなわち言語的発想法にも注目する必要があることを示唆しているものと考えられる。また、そのような言語的発想法の地域差の成立には、社会的・文化的背景が大きく関わっていると考えられ、それらの解明も興味深い課題である。

論文審査結果の要旨

本論文は、その題名が示すように、日本語の方言形成論をテーマにしたものである。論の全体は、「序論」「本論」「結論」の3部から組み立てられ、「本論」にあたる部分は6つの章から構成される。

「序論」第1章「日本語方言形成論の立場と課題」では、本論文のテーマである日本語方言形成論の立場や、方言形成論の現状をふまえた現段階の課題について述べる。第2章「本論文の目的と方法」では、前章の課題を受けて3つの目的を設定し、かつ、本論文で用いる方法と資料について解説する。

「本論」第3章「社会構造の地域差と方言形成－「シャッター(舎弟)」を例として－」および、第4章「民俗儀礼の変遷と方言形成－〈葬式〉の名称を例として－」においては、方言形成の要因として、社会的背景に注目する。すなわち、前者の事例では、地方側の社会構造の違いが中央語の受容を拒んだり

促したりすることを指摘し、後者の事例では、方言分布の形成が事象自体の社会的性質の変化と呼応してなされる場合のあることを明らかにする。

「本論」第5章「意味変化の地域差と方言形成－「スガリ〈蜂〉・〈蟻〉」を例として－」および、第6章「意味変化における位相差と方言形成－「スガル〈鹿〉」を中心として－」においては、方言形成における意味変化の問題を扱う。すなわち、前者の事例では、地方における意味変化の傾向が従来の指摘とは異なる場合のあることや、意味変化の過程に地方独自の要因が絡むことにより、変化を抑制・促進することがあることなどを指摘し、後者の事例では、地方における意味変化と、中央における意味変化のメカニズムが、位相差を契機として大きく異なる場合があることを明らかにする。

「本論」第7章「感動詞の歴史と方言形成－失敗の感動詞を例として－」および、第8章「感動詞の成立と方言形成－痛みの感動詞を例として－」においては、従来未開拓であった感動詞の方言形成について論ずる。すなわち、前者の事例では、東西日本で「分化・未分化」「定型化・非定型化」などの顕著な対立が認められ、東日本から西日本へ向けた変化の発達段階が読み取れることを指摘し、後者の事例では、感動詞化の現象が東日本より西日本で進行したことを明らかにする。

「結論」第9章「本論のまとめと今後への提起」では、本論（第3章～第8章）で論じたことを整理するとともに、第2章で掲げた3つの目的に対応させた形で結論を述べ、さらに、方言形成論の理論化・一般化に向け、本論文が提起する課題を示す。

本論文は、方言研究の中核をなす方言形成論について先端的な課題を示すとともに、全国調査の結果による事例研究を展開することで、理論化・一般化に向けた提言を行ったものである。社会構造と方言形成の関係や意味変化の東西差、感動詞の方言形成などをテーマに、斬新な発想と説得的な論述によって構築される本論文は、方言形成論の新たな一ページを切り拓くものとして高く評価される。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。